

## 第10回国際タイ学会日本部会に寄せて

佐藤 康行

SATO Yasuyuki

第10回国際タイ学会が2008年1月9日から11日にかけてバンコクのタマサート大学で開催された。今回の大会ほど多くの日本人が参加したことはないと思う。報告者だけを数えても28名いる。その他、討論者や参加だけの人をくわえると30名を優に超える。今回いちじるしく増えた理由は、近年若手のタイ研究者が増えたこと、またバンコクで開催されたために参加しやすいことにあるだろう。大会全体の感想のほか、日本のタイ研究の部会をもうけた経緯と成果について紹介する。

大会では、シリキット王女の開会挨拶のあと、以下のような基調講演があった。はじめにピリヤ氏はこれまでのタイ研究の経緯を概観した。タイ研究のおおよその流れをとらえるうえでとてもよくまとめられていた。ついで、カイズ氏はみずからがおこなってきた東北タイ農村調査について報告された。わたしのように東北タイ農村調査をしている者にとってはとても有益であった。最後に、福井捷朗氏が立命館アジア太平洋大学が実施している留学生教育について報告された。

わたしが主として参加した部会は、政治・王制部会と少数民族、サブカルチャー部会である。政治・王制の部会は一昨年クーデタが勃発し、国政選挙も実施されたばかりであったこともあり、参加者がとても多かった。多くの研究者の関心がそれに集中していることがよくわかった。これらのテーマは結論が簡単にできるものでないため、各自が自分の主張を言って終わり、議論がかみ合わな

いことが多かった。

ついで、少数民族部会（モン族など）に出席したが、内容は少数民族のシティズンシップの権利が十分獲得されていない状況の報告と、少数民族の出身者によるディアスポラ文学についての報告があった。サブカルチャー部会では若者のポップスやロック・ミュージックの研究が面白かった。タイのサブカルチャーの現状を知ることができたことはたいへんよかった。研究のアプローチは欧米の理論に依拠するものが多かった。こうした理論を踏まえた研究をすることはたしかに大切である。しかし、わたし自身の反省でもあるが、欧米理論の適用に終わらずに、それに代わる独自の理論の構築を模索することも併せて重要なことだと痛感した。

最後に、日本部会について紹介したい。約10年前の1996年にチェンマイ大学で開催された第6回国際タイ学会において、日本人のタイ研究の成果を冊子にして大会に参加した人々に配布した。これは日本タイ学会のホームページにアップされている。その後10年が経過したため、その間の日本人のタイ研究成果を国際タイ学会で報告しようという北原・赤木両氏の意向を受けて今回企画されたものである。この呼びかけが国際タイ学会の要約締め切りの直前であったことから、わたしが個人的に報告者を選び依頼することになった。報告する分野は研究分野ごとにして報告者を選出した。ほかの分け方もあったが、学問分野ごとに分

けるほうが現状ではわかりやすいだろうと考えたためである。教育学は独立させて取り上げることも考えられたが、最終的に社会学の分野に含めて報告した。政治学は高橋正樹氏、経済学は東茂樹氏、社会学は櫻井義秀氏、歴史学は加納寛氏、文化人類学は村上忠良氏、宗教学は矢野秀武氏、文学は平松秀樹氏にそれぞれ依頼し承諾をいただいた。あらためて各位にたいしてお礼申し上げます。

報告内容は、各自が分野ごとに主要なテーマをあげ、それに即して重要な研究成果を紹介し論評するかたちをとった。こうしたかたちにしたのは、たんなる紹介を避けるためであった。そのため報告では、すべての著書・論文を紹介することはできなかった。大会では、**Thai Studies in Japan: 1996-2006** という部会名でおこなった。ひとつの部会は政治学・経済学・社会学の報告、もうひとつの部会は歴史学・文化人類学・宗教学・文学であり、2つの部会を続けて開き、討論者として北原淳氏にお願いした。

こうした報告は日本人による研究成果の発信という点で意味あるものである。しかし、部会には日本人の参加者はいても、外国人がそれほど参加していなかった。この点は反省される。もっとも、わたしが参加して感じたことは、クーデタが2006年に起きているので、いま関心のある政治や王制をテーマとする部会に参加者は集中していたように思われる。そのため、少数民族や周辺民族のテーマ部会でも参加者はきわめて少なかった。

今回のように国際学会で部会をもうけて日本人の研究成果を報告するのは初めてのことであった。今回の反省のうえにたつて、今後どのように取り組むべきかという課題も明確になった。反省すべき点は、聴講者にタイ人の参加も含めて欧米人の

参加が少なかったことである。今後は、タイ人や欧米人を含めてなんらかの企画に取り組むこともとめられる。たとえば、タイ人や欧米人にコメンテーターを依頼したり、彼らが日本人のタイ研究をどう評価するかを聞く機会をもうけるなど、国際タイ学会での日本部会のもちかたを考える余地があるだろう。それ以外には、今回の報告書を世界の主要な大学・公立の図書館に送付することも考えられる。日本タイ学会のホームページの英文版も今後は必要になるだろう。このように、今回の国際タイ学会での日本部会開催は、次回に向けて課題が明確になった点で意義あることであった。

なお、日本タイ学会からこの報告は出版する予定である。出版にあたっては、報告のさい取り上げられなかった著書や論文も文献一覧に掲載するようにした。また、著書・論文名だけでも日本語表記を付した。これは、タイ研究の文献一覧としても活用できることを考えたためである。重要な文献が落ちないように配慮していただいたとはいえ、最終的には執筆者によってはもれてしまった文献もありうる。ご寛容を乞うしだいである。

グローバル化がすすむ現在、日本タイ学会が成長を続けていくために世界に情報発信していく態勢づくりがいつそうもとめられるだろう。